

Title	ポリシェヴィズム研究における内容分析と精神分析の方法 (二・完) : N・ライツの研究を中心として
Sub Title	Content analysis and psychoanalysis in the studies of Bolshevism : with emphasis on N. Leites view (2)
Author	奈良, 和重(Nara, Kazushige)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1959
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.32, No.9 (1959. 9) ,p.33- 54
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19590915-0033

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ポリシエヴィズム研究における

内容分析と精神分析の方法 (二・完)

— N・ライツの研究を中心として —

奈 良 和 重

- 一 アメリカにおけるポリシエヴィズム研究の諸類型
- 二 ライツの『ポリシエヴィズムの研究』と内容分析の概念
- 三 内容分析の一例示……………以上前號
- 四 ポリシエヴィズムの精神分析的解釋……………以下本號
- 五 ライツの研究をめぐる問題點

四

このようにして、ライツはポリシエヴィズムの内容分析をおこなっているが、その内容データに對しては、さらに、精神分析理論に基づく推論^{インファレンス}、ないしは解釋があてはめられている。ここにおいては、ポリシエヴィキによつて表明された内容というよりも、そのかくれた意味、つまり、ポリシエヴィキがどうしてかくかくの行動をとるのか、また、とらざるをえな

いのか、という内容の深奥にひそむ無意識的動機が問題とされているわけである。もちろんライツは、データ全部にそういつた解釋をくだしているのではなく、右の例證などは、とりたてて、精神分析的であるという必要もない。だがところどころに、彼の獨創性に満ちた解釋が見受けられる。内容分析におけるデータ解釋にはいろいろと問題が多いようであるが、つぎに、ライツの精神分析的解釋の應用を、いくつか記しておきたいと思う。

「ここに一つの政治的法則がある。いやあるいは自然的法則であるかもしれない——お互に近接した二人の強力な隣人は、たとえどんなに親密であつても、ついには相手を倒そうという希望をいだくようになり、おそかれ早かれ、この希望を實行するにいたるといふ、すなわちこれである。(この強い隣人同志的法則については、われわれロシア人はもう少し考えてもよからうと思ふ)」。ドストエーフスキイの慧眼はこのように見抜く。そして、ポリシエヴィキ自身は、まさにそのように政治の本質を定式化しているのである。すなわち、「問題は、だれがだれを追放するか、あるいはだれがだれを解散するかにある」(レーニン)。「われわれは、『だれがだれを』というレーニンの定式にしたがつている。われわれが、彼ら資本家をうちたおし、レーニンが言いあらわしたように、最後の決戦をさせるか、それとも彼らがわれわれをうちたおすかである」(スターリン)。

この《だれがだれを》という政治的關係こそ、いつまでも、黨と外部世界とのあいだにあるリアリスティックな問題である。ライツのいうように、「《だれが—だれを?》という問題が、世界共産主義の統合によつて決定されない——そしてそれは、そうならなくては決定されえないのだが——限り、世界は、根本的に、高度の緊張状態におかれている。もし黨が、このことを忘れるとすると、それは緊張が減少されるのではなく、將來の鬭争過程において、自己自身の破滅を確實なものにしてしまうだけである。ポリシエヴィキにとつては、高度の緊張状態こそ政治のノーマルな状態である。彼らはそれを、どうにもやつていけないものとして體驗するのではなく、むしろ、かならず耐えてゆけるものとして體驗する。西歐人のいわ

ゆる《眞の同意》なるものは、ポリシエヴィキにとつて考えることができないうに思われる。……唯一の《眞の決定》は、競争者のいづれか一方が、まつたく破壊しつくされてしまうことによるのである。この最後の目的が達成される以前は、すべてのみせかけの《解決》は……相つぐ葛藤における武器にしかすぎない⁽⁴⁾。

スターリンが「……死滅しつつある階級の最後の残存分子の反抗……彼らが死滅しつつあり、かつ最後をとげようとしていればこそ、彼らは一つの突撃形態から他のもつと鋭い突撃形態にうつる……」⁽⁵⁾と述べているように、ブルジョワジーは、傷ついた野獸さながらに、ますます兇暴となり、破壊衝動に驅られてゆく。ブルジョワジーは《恥知らずにも、すべての假面をぬぎすて》、自らの破滅を早めつつある露出症的症状を呈している。《だれがだれを》という關係において、ポリシエヴィキが恐れおののいているものは、表層的には、そういつた外部世界に對する危険、《現實不安》の體驗であるには違いない。がしかし、そのみが、いやそれがほんとの彼らの恐怖の源泉なのであろうか。

一九〇七年、レーニンはつぎのように書いている。

わがプロレタリアートは、ロシアのブルジョワ革命から、ブルジョワジーに對する三重の憎悪と、ブルジョワジーとたたかう決意とを、ひきたすがよい。……わがプロレタリアートは、わが革命から、小ブルジョワ的な無氣力や動搖にたいする三重の侮蔑をひきたすがよい。⁽⁶⁾
と。ここで注目すべきことは、ポリシエヴィキは、かえつて自らをその敵對者たるブルジョワジーと同一視している、ということである。ブルジョワジーは憎悪すべき存在である。それは、ポリシエヴィキと同じように、憎むべき目的を追求しているからにはかならない。それに反して、小ブルジョワの態度はどうか。彼らは、敵のもちいる欺瞞にあざむかれ、敵に好意をよせたがり、無氣力な受身的態度をとりがちである。かくて、「……ポリシエヴィキがはつきりと認められた自己(權)力を追求する自己」と相似していると信じているのは、權力ある《ブルジョワジー》である。彼が自分の自己のうちに恐れている弱さを歸すべきものは、ほかならぬ無氣力な《小ブルジョワジー》に對してである⁽⁷⁾。

このようにみると、ポリシェヴィキの恐怖の源泉は、むしろ自己自身もその分身にほかならぬロシアの人間、とりわけ、ロシア・インテリゲンツィアの諸性向のうちに見出せるといつてよい。ライツはいう、「……黨内の潜在的な敵たちに對する好感に屈従することについての意識的恐怖は、黨外のひとびとや集團に對する同じような危険に屈服してしまうという無意識的恐怖と、ほぼ對應している」と。それ故、ポリシェヴィキの《意識》が、かくも強ければ強いほど、じつはその深底に、それと反對の衝動が隠されている、ということが推測される。ポリシェヴィキは、外部世界からの死にももの狂いの抵抗に直面させられているのみか、より根本的には、それ自身に内在するところの危険に脅かされているというわけである。「恐れられて、潜在的攻撃者に對する言語上の敵對心の意識的根據は、意識下の防衛——外部的危険に對するよりもむしろ、内部的危険に對する防衛をおおい隠している」とみなされよう。

ドストエーフスキイの『作家の日記』の一節にいうように、

悲劇的なロシア・インテリゲンツィアの特性は、ものに應じやすいことである。いつでも待つてましたとばかり賛成する癖である。……ロシアでれつきとした人間の大多数に君臨しているのは、讓歩しやすさ、讓歩と贊成の要求である……ロシア人は、自分で自分を誘惑し、阿諛し説得し、夢中になることが大好きなのだ。⁽¹⁰⁾

ポリシェヴィキが眞向から反對するのは、まさにこうした讓歩的、妥協的態度である。黨は敵たちを憎悪するとともに、自らは憎悪の對象となるようでなければならぬという。一九二七年、スターリンは、黨の一般方針の本質を論じて、つきのように述べている。

この方針は正しいであろうか。

しかり、正しい。わが黨の一般方針が唯一の正しい方針であることは、事實がものがたつてゐる。

.....

このことを證明しているものは、わが階級敵、すなわち資本家たちの出版物、法王とあらゆる種類の僧正たち、社會主義者およびアブラモウイチヤダンのような型の「ロシアの」メンシェヴィキが、さいきんわが黨の政策にたいして氣ちがいのようにほえたてていることである。資本家とその下僕たちは、わが黨を中傷している、——つまり、わが黨の一般方針は正しいのである。⁽¹¹⁾

敵たちに好感を抱き、あるいは、彼らから好感を期待することは絶対に危険である。ポリシエヴィキは不屈さ(unyieldingness)を強調しつつ、かかる感情の侵略を防禦する。しかしライツは、ここにつきぎのような事實を讀みとる。「屈従しがちなことに對する反動形成 (reaction-formation) の不安定さについての意識——その意識は、意識の下位において、部分的に、屈従しがちなことに對するポリシエヴィキの激しい攻撃を説明している」と。⁽¹²⁾

ともかくも、ポリシエヴィキは、共產主義が完全に樹立されるに至るまでは、人間同志の愛というものは不可能であることを主張し、「敵の破壊性がまったく合理的であるということ肯定することによつて、……敵が交友的であるという無意識的期待、そう欲する要求を阻止しようとする」。⁽¹³⁾ しかしながら、ロシア・インテリゲンツィアにしばしば見受けられる特徴は、およそ、その意圖とはかけ離れたものである。ポリシエヴィキがかくも人間のあいだの破滅的關係を強調することは、⁽¹⁴⁾ それ自體、「敵に對してより破滅的でないように振舞ひ、敵に對して破滅的な意圖よりも、よりよいなにかを歸せしめようとする性向」⁽¹⁵⁾と闘おうとするからにはかならない。ロシア・インテリゲンツィアは、人間同志が互いに抱擁しあうような奇蹟的變革を夢みる。ドストエーフスキイの短篇小説『いやな話』の人物イヴァン・イリツチは、

三段論法でいえば、自分は人道的である。したがつてまた信頼される。信頼されるから、したがつて信任をうける。信任を受けるから、したがつて、愛される。……いや……信任されるから、したがつて、改革そのものも、みんなに信用されるようになるのです。人は、いわば、……精神的にお互い同志抱擁し合い、すべての問題を友愛的に、根本的に解釋するでしょう。⁽¹⁶⁾

という。この文章を、ポリシエヴィキ流にパラフレーズすると、つぎのようになる。

自分⁽¹⁶⁾は人間的である。したがって憎まれてはならない。憎まれてはならないから、自分が持出しそうとしている改革も信じてくれないだろう。人は、精神的にも、あるいはまた肉體的にも、お互い同志(自分を)抱擁しあうよりか、むしろ、お互い同志殺しあうだろう(もし人を殺さないと、自分が殺される)。すべての問題は敵對的に解決されるでしよう。⁽¹⁷⁾

ポリシエヴィキにとつては、人間同志、とくに男性同志が抱擁しあつていようなイメージは、いやらしく恐しいものである。それこそ欺瞞のしるしであり、やがては屈辱的破壊の憂き目にあわされることにならう。こういう場合に、ポリシエヴィキが繰返しもちいる言語的表現は、彼らが敵たちと抱き合つて、接吻している肉體的近接のイメージである。つまり、

われわれの言つたとおりではないか！ パルヴス氏は……オスヴォジデーニエ派の人間とめぐりあつて、抱きあうだろうと……⁽¹⁸⁾

ベルンシュタイン主義者たちは、恥知らずにも、彼「ブレハーフ」に投げキスをおくつて⁽¹⁹⁾いる。

シャイデマンの一黨は、「自派の」人間としてカウツキーに接吻し、彼を抱擁して⁽²⁰⁾いる。

といつた具合である。このようなデータから推測しうることは、ポリシエヴィキが、敵を殺すか、敵によつて殺されるかといふことを強調することは、實際に、人間を抱擁しよう、または抱擁されようという、恐怖をおわされ、罪意識をともなつた願望を阻止しようとする努力ではないのか、といふことであり、「この假説は、……ひろくゆきわたつていようポリシエヴィキのある傾向、受身的であることの恐怖、コントロールされ利用されることの恐怖、攻撃に屈従したいという恐怖、の存在と一致す。ひとが、殺したいといふ自分の願望を肯定することにより、接吻したいといふ願望を否定すると、このことは、多分、ポリシエヴィキが激しくもちいる投射の機制(mechanism of projection)によつて、敵のもつ殺人の願望に對する自己の信念を、一層強化することになる⁽²¹⁾」と、ライツは述べている。

このことと關連して、ライツは、レーニンの生涯における親密な友人關係とその決裂に、「受身的同性愛(passive homo-sexuality)の幻想⁽²²⁾」と、それへの反撥という傾向を示唆している。九〇年代には協力者であつたストルーヴェ、『イストラ』

や『ツアルヴァ』誌における同僚であつたポトレソーフ、レーニンがその理論上の師と仰いでいたプレーハーノフ（ライツは ambivalently loved master といっている）、一九〇三年までは非常に緊密な間柄であつたマルトフ、それから、アレクシンスキイ、マリノフスキイ、ジノヴィエフ、カマーネフ等々いざれも、レーニンは彼らとの睦まじさを絶交するや、イデオロギー上の裏切者として、非難した。一九〇五年十月に、彼はポトレソーフについて、次のようなノートを書きとめてゐる。

……同志スタロヴェル（ポトレソーフ）は、あいかわらず新『イスクラ』の紙上で、彼が……舊『イスクラ』に参加して罪をおかしたことを懺悔^{おぼやかし}している。同志スタロヴェルは、チェホフの短篇小説『可愛い女』の女主人公に非常によく似ている。可愛い女は最初劇主といつしよにくらしており、こう言つたものである。私とヴァニチカは、まじめな戯曲を上演しています、と。つぎに彼女は木材商といつしよにくらし、こう言つたものである。私とヴァンチカは、木材の關稅が高いのに憤慨しています、と。最後に彼女は獸醫といつしよにくらし、こう言つたものである。私はコリチカといつしよに馬の病氣をなおしています、と。同志スタロヴェルもそのとおりである。「私とレーニンは」マルトイノフを罵倒した。「私とマルトイノフは」レーニンを罵倒している、と。愛すべき社會民主黨の可愛い女よ！ あすはお前はだれの腕にだかれているだらうか？⁽²⁸⁾

もうひとつ、ポリシエヴィキが、黨そのものにおける危険と誘惑に對するカウンター・パートとして、黨の目標定位にすべてのエネルギーを充填せしめようとする努力を、ロシア・インテリゲンツィアに特有な死の觀念^{死の觀念}といふものからみた解釋を示しておく、次のごとくである。「ポリシエヴィキが手段を強調することの底には、なにも努力するあてもないままに、生そのものを目的として生きねばならない生活にゆだねられてしまうことの恐怖といふものがある。かかる期待は、ぼんやりとした不安や罪を惹きおこすように思われる。そこで生は満足にみだされて、⁽²⁴⁾やがては即時の死へと導かれる。このことは、トルストイの『クロイツェル・ソナタ』にあらわされている」といふ。すなわち、そのなかで、語り手とボズドヌイシ

エフとの會話のある箇處に、人類が存續できなくなろうとも、一切の肉の愛、情欲を絶滅しなければならず、所詮、人間は生きてゐる必要などなくなるといふ意見がかわされてゐる。⁽²⁵⁾これに對して、ポリシエヴィキの死に對する態度は、一九二一年、ラファルグ夫妻の自殺を知つたとき、レーニンは「彼らは年老いて鬪争に必要な力がつきた」のだと慨歎し、「黨のためにそれ以上働けなくなつたら、眞理を直視してラファルグ夫妻のように死ぬことができなければならぬ⁽²⁶⁾」といつたといふ、クループスカヤ夫人の回想の言葉に、明瞭に察知されるのである。

ポリシエヴィキは、なによりも先ず、仕事への生きがいを感じしめるように、そして現在の生を生きるというのではなく、自己を犠牲にしての黨へ獻身を強調してやまない。生活——彼らにとつて、政治こそ個人を全體的に包絡すること (total involvement) である——とは、犠牲であり、犠牲とは將來の喜悅を確保するための手段である。したがつて、「獻身的な黨員にとつては、彼の生活は、隅々まで全體として、疑いなく有意味である。かくて彼は、ロシア・インテリゲンツィアのあいだで、しばしば感じられ、非常に恐れられてゐる憂うつな生活體驗、つまり、すべての物ごと、そしてとくに、日々の活動 (全體をかたちづくらぬ數知れぬ斷片) の、わけも分らぬ空しさや取りとめなさの體驗を避けることができるのである。より詳しくいふと、黨への獻身は、インテリゲンツィアにきわだつてみられるような感情、破壊的な力としての死にうちひしがれるという危惧の念、ならびに、破滅としての死に對する信念によつて呼びおこされる取りとめなさの感覺、そういうものを阻止してくれる不死の感情を誘うのである。……黨と共產主義のみが本質的なものであるという主張は、ロシア文學に頻繁に、しかも強度にあらわされてゐる感情——いつでも、死というものが唯一の現實であるという感情を阻止してゐる。」⁽²⁷⁾

黨への獻身は、意識の要求する自己否定的同調性を強化する。それはさらに、あらゆる感情の抑壓 (repression) ——スターリン主義的な黨のへ一枚岩的《性格の intra-psychic counterpart》⁽²⁸⁾——を強制し、《個人的》動機⁽²⁹⁾の壓力が黨に侵略してゐることを防衛する。……全世界のプロレタリアートを、ちつぽけな、日常の、些末な任務の水準以上にたかめようとし、

またたかめた、革命的思想の巨人たち〔マルクスとエンゲルス〕……⁽³⁶⁾の壮大で歴史的に價值ある眞實、その偉大なる仕事に犠牲をかえりみず、課題を遂行することは、やはり、ロシア・インテリゲンツィアが恐れているエゴイズムという罪⁽³¹⁾を陰蔽してくれる。「黨への献身は、《エゴイスト》であるという罪意識に對する防衛、すなわち、こうした危険に對する反動形成として、また、ひとがひきおこしてしまつたと感ずる損害に對しての補償として、役立ちうるであらう⁽³²⁾」。共産主義という映像、それはエゴイズムの廢棄であり、結局は、《各人の要求に應じて、各人へ》という原理をもつて、《たれがだれを》という關係を廢棄しようとするものである。⁽³³⁾レーニンはいふ。

狹義の、嚴密な意味では、共産主義的勞働とは、社會のための無償勞働であり、ある特定の義務をはたすためではなく、ある特定の生産物に對する權利を得るためではなく……報酬をめあてにしない、……公共の利益のために働かねばならないということを目覺した⁽³⁴⁾（そして習慣となつた）態度にもとづく勞働のことであり、健康な身體の欲求としての勞働のことである。

また、青年同盟の任務に關して、

古い社會は、自分がほかのものからうばうか、それともほかのものが自分からうばうか、自分がほかのもののために働くか、それともほかのものが自分のために働くか、奴隸所有者となるか、それとも奴隸となるかという原則のうえにうちたてられていた。だから、この社會でそだつた人々が……自分の取分にしか心をつかわず、他人のことなど知つたことではないとする人間……の心理、習慣、觀念を取りいれるのは當然である。……

青年同盟員であるということは、自分の活動、自分の力を共同の事業にささげるように仕事をすすめることである。これこそ、共産主義的教育である。このように活動を通じてこそはじめて、青年男女は眞の共産主義者に變るのである。⁽³⁵⁾

いまやあきらかなように、ライツの解釋においては、ポリシェヴィキ的性格とは、それ以前のロシア・インテリゲンツィアとの對立葛藤、それに對する自己防衛として、たちあらわれているものとされている。それはあたかも、個人のパーソナリ

ティ領域における自我とイドとの關係とパラレルである。自我が、いろいろの防衛機制 (defense-mechanism) によつて、本能的衝動を抑壓したり、その對立物に集中化する反動形成をつくりあげたりして、自らの安全を保つてゆくのと同じように、ボリシエヴィキという自我は、ロシア・インテリゲンツィア、オプロモフ的人間によつて、たえず危険や不安にさらされており、その緊迫した状態を、否定したり、あるいは、外部に投射したりして、防衛的手段を講ぜざるをえない、というわけである。さらに、ボリシエヴィキの性格には、彼らがその支配を受けざるをえず、また喜んでその支配を受けようともしている、超自我——ライツはそれと明確な表現をあたえてはいないが——も存在する。「威壓的に強い、冷静に懲罰を加えるインバーソナルな代理者の命令——《歴史》、《現實》、《事實》、《戰略》、《政治》、《革命》⁽³⁶⁾」といったものがそれであろう。

- (1) ドストエーフスキイ『作家の日記』ドストエーフスキイ全集第十四卷二五一頁。
- (2) レーニン「カデットの勝利と労働者黨の任務」(一九〇六年三月二十四日—二十八日)レーニン全集第十卷二二二頁。
- (3) スターリン「ソ同盟共産黨(ボ)内の右翼的偏向について」(一九二九年四月)スターリン全集第十二卷五三頁。
- (4) Nathan Leites, *The Study of Bolshevism*, p. 29.
- (5) スターリン「ソ同盟共産黨中央委員會・中央統制委員會合同總會での演説」(一九三三年一月七日—十二日)全集第十三卷二三四—二三五頁。
- (6) レーニン「政治家の覚え書」(一九〇七年八月二十二日)全集第十三卷六五—六六頁。
- (7) Leites, *op. cit.*, p. 379.
- (8) *Ibid.*, p. 421.
- (9) *Ibid.*, p. 38.
- (10) ドストエーフスキイ『作家の日記』、全集第十六卷一〇七頁。
- (11) スターリン「ソ同盟共産黨(ボ)第十六回大會にたいする中央委員會の政治報告」(一九三〇年六月二十七日)全集第十二卷三六五頁。
- (12) Leites, *op. cit.*, p. 418.

ライツは、屈從ぐせに對する反動形成の不安定さを示す例として、ゴーゴリ『死せる魂』のつぎの一節をあげている。「このブロンドは、何よりも頑迷を特長とする人々の一人であつた。こういう連中は、口を開けばもう口論をはじめようとするし、自説に明らかに反對

なことには断じて同意せず、馬鹿を利口と言いませず、ことに他人の笛で踊るなどということは決して承知しない組なのだが、結局は、いつもその特長の弱點が暴露して、拒否したことに賛成し、馬鹿をも利口と言ひ、他人の笛で結構上手に踊つてしまふ……」(全集第三卷九一頁)。

(13) Leites, op. cit., p. 416.

(14) しかしながら他方で、ポリシェヴィキは、ロシアの性格にしばしばあらわれる無暗な暴力の行使にも反対する。その典型的な例は、ドストエーフスキイの『悪靈』におけるスタヴロギンの行動である(全集第九卷三九頁参照)。また他方で、全面的な破壊衝動にも反対する。ライツの引用例によれば、『カラマゾフの兄弟』において、リーザがアリオシアに語っている「どこにも何一つないようにしてしまいたいからよ。ああ何もかもなくなつたらどんなに嬉しいことでしょう」というような態度である(全集第十三卷一八三頁)。さらには、ドストエーフスキイがロシア人全體の特性として指摘している「あらゆることにおいて一切の尺度を忘却してしまふこと……これは極限を超えようとする要求であり、戦慄の要求である。深淵に近よつて半身をその端に乗り出し、深淵の底を覗きこもうとする要求で、時としては、といつても、かなりはげしく見られる現象であるが、その中へ氣ちがいのよう眞逆さまに飛び込もうとする要求」(『作家の日記』I、全集第十四卷三八頁)、こういつた自己破壊的衝動にも反対である。その代表的な例は、『悪靈』におけるキリーロフの自殺への意志である(全集第十卷一七八頁参照)。

(15) Leites, op. cit., p. 401.

(16) ドストエーフスキイ『いやな話』全集第二卷三三七頁。

(17) Leites, op. cit., p. 402.

(18) レーニン「地主の國會ポイコット論」(一九〇五年十月十日)全集第九卷三四三頁。

(19) レーニン「カデットのプロクツについて」(一九〇六年十一月二十三日)全集第十一卷三二二頁。

(20) レーニン「ブルジョワジーは背教者たちをどう利用しているか」(一九一九年九月)全集第三十卷二二頁。

(21) Leites, op. cit., pp. 403-404.

(22) Ibid., p. 236.

(23) レーニン「社會民主黨の可愛い女」(一九〇五年十月)全集第九卷四四二頁。

(24) Leites, op. cit., p. 100.

(25) ライツの引用箇所については、『トルストイ』クロイツェル・ソナタ』中村白葉譯(角川文庫)四三一―五二頁参照。

- (26) クループスカヤ『レーニンの思い出』下巻七頁。
- (27) Leites, *op. cit.*, pp. 136-137.
- (28) *Ibid.*, p. 187.
- (29) *Ibid.*, p. 193.
- (30) レーニン『J・F・ベッカー、J・デイーッゲン、F・エンゲルス、K・マルクスその他からF・A・ゾルゲその他への手紙』のロシア語譯序文(一九〇七年四月六日)全集第十二卷三八一頁。
- (31) ボリシエヴィキは、自由とか人格を尊重する、いわゆる個人主義的傾向に反對する。それは、たとえば、ペリンスキイのつぎの表現にみられるごとき立場である。「……主體、個人、人格の運命は全世界の運命より重大である。……かりに私が發展の梯子の絶頂に昇ることを許されたとしても、その絶頂でさえ私は、偶然や、迷信や、フィリップ二世の宗教裁判等々のあらゆる犠牲に對して納得の行く説明を求めたであらう。さもなければ、むしろその絶頂から、眞逆様に墜落した方かよい……」(Nicolas Berdyayev, *The Russian Idea*, New York, Macmillan, 1948, 田口貞夫譯「ロシア思想史」[創文社刊、一九五八年]九一頁)。
- (32) Leites, *op. cit.*, p. 139.
- (33) *Ibid.*, p. 140 and p. 438.
- (34) レーニン「古來の制度の破壊から新しい制度の創造へ」(一九〇二年四月八日)全集第三十卷五三八頁。
- (35) レーニン「青年同盟の任務(ロシア青年共產同盟第三回全ロシア大會での演説)」(一九二〇年十月二日)全集第三十一卷二九二頁、二九五頁。
- (36) Leites, *op. cit.*, p. 484.

五

かくて、ライツのボリシエヴィズムに對する考え方は、その基底において、ボリシエヴィキの政治的態度、なかんずく、そのエリート独自の行動の基準枠に、すべてが還元され、そこから彼らのいわゆるストラテジー——ライツはこれをオペレーションナル・コードと呼ぶ——が派生する、ということである。先に列擧したカテゴリーにしても、それらがボリシエヴィ

キのパーソナリティ・レヴェルでの行動規制に多く依據しているということは明白である。世界のラディカルな變革を目指しつつあるポリシエヴィキにとつては、社會主義とか共產主義とかいう曖昧なタームで示される制度上の變化が、人間自身をも變化せしめると信じられ、その究極的價值目標は餘りにも自明なものとされている。ポリシエヴィキ黨は、まったく《意識的》な政治組織體であつて、進行しつつある歴史的過程（今世紀にあつては、資本主義から社會主義への移行ということ）における、さまざまな好機を利用し、それらを現實へ轉化させようとしている。共產主義の世界的規模における勝利、ポリシエヴィキのオペティミスティックな信念は、きわめて確固たるものである。しかしその反面、《たれがだれを》破壊するかという危険に對して、彼らほど敏感な神経をもつたものもない。彼らは絶えず鬭争し、攻撃し、防禦しなければならぬ。すなわち、大衆の《自然成長性》に對しては意識をもつて、革命のロマン的感傷に對しては權力の極限的擴大をもつて、曖昧さと饒舌に對しては嚴密さをもつて、情動や悲哀に對しては制御と堅固さをもつて、動搖や教條的頑迷さに對しては忍耐と柔軟性をもつて、無抵抗に對しては突き進んでゆく行動力をもつて、散漫さに對しては力の集中をもつて、しなければならぬ。かくて黨は、危険を附近に控えて、あるときは退却を容認しつつ、前進に前進を重ねなくてはならないのである。こういつたポリシエヴィキのオペレーションナル・コードは、ライツの指摘するように、彼らの心的態度から生じているし、それは實際、「行動に關連づけられた體系」として把握されるべきものである。たしかに、ポリシエヴィズムというイデオロギーは、本源的なマルクス主義理論の照明によつて説明されるべきものであろうけれども、むしろその行動化したイデオロギーの側面には、彼らのパーソナリティが大きく影響している。したがつて、ライツが「わたくしは、わたくしが記述しようとするオペレーションナル・コードが、ポリシエヴィキ・エリートによつて採用されるようになった、また、コード自身が受けた諸變化を生ぜしめるにいたつた條件の複合を、體系的にあきらかにしようとは試みない。かくて、わたくしは、このコードのさまざまな要素にみられるイデオロギー上の由來 (ideological derivation) には、關心をもたない」(傍點筆者)⁽²⁾とい

う見解をとつているのも肯定されよう。

がしかし、このことが同時に、ライツのポリシエヴィズム研究のもつ長所であるとともに、彼の採用する方法そのものに歸因する缺陷でもあるということをも、指摘しておかねばならない。ポリシエヴィキの行動は、それがいかにパーソナルな動機づけによるものとみえても、イデオロギー化された關節點を切斷してしまつては、その固有な特徴を見失なつてしまつてことになるからである。彼らの行動のレヴェルだけをみると、それは、レーニンのパーソナリティ特性と相關關係にあり、事實、彼を中心とする黨の役割が、ポリシエヴィキの歴史的形成的場で、壓倒的な比重を占めていることは疑いない。しかしながら、A・マイヤが指摘しているように、「このコードのマキアヴェリ原理は、基本的には、教義よりもパーソナリティによつて、はるかに多く決定づけられている。……この理由からして、ライツ教授が、オペレーショナル・コードを論ずるにあたり、精神分析的シンボルをもちいていることは正當化されるのである。しかしながら、このコードを、より廣いマルクス主義的傳統、課題、教義との關係においてみることは有益である。レーニン主義は、心的状態として取扱うこともできるが、それと同等の正當な根據をもつて、體系的政治理論として取扱うことができるのである。……これら二つの觀點は、相互に補足しあわねばならない。なぜなら、理論的側面と心理的側面とは相互依存的であるからである」ということは、當然のことと思われる。

ついでに、ライツの精神分析的解釋について觸れてみる。ベルはつぎのように批判している。「ひとはたずねるであらう、どんな意味で、ひとつの思想の背後にある原初的衝動が思想そのものよりも《現實的》であるのか、と。これは、精神分析的思考に關連してたびたび出會わされる困難である。思想の背後にある、心理的衝動というものが、思想のもつ眞實をテストするものではないことは、明瞭である。眞實についてのテストは、思想が発生した後、おこつてくるものである。ところがわれわれは、隠された主要動機をあざ笑う勿れ、とおしえられる。というのは、われわれは思想を扱つてい

く、思想がささえられ、もちいられている方法を扱っているからである。と。ライツの論するところでは、どんな見解でも、屈強さ、誇張、強度をもつてささえられているもの——共產主義のすべての見解がそうであるが——、そして、合理的テストをすべて激しく拒絶するものは、それが、思想に矛盾する強い無意識的願望と恐怖に對する防衛をかたちづくつてゐるものだ、という假定を提起する、というのである。軍人になるというように、歴然たる男性らしい職業に従事することが、そのひとに對して、《潜在的同性愛》というレッテルを貼りつけるものではない。彼が、強迫的に、猛々しく、理性を超えて、自らの軍人的態度を主張するのをみいだすとしても、われわれは、《常識》でもつて、彼はするように装うているよりか男性らしくないことを恐れているのだ、と疑ぐつてみる事ができるのである⁽⁵⁾。

ポリシエヴィキの性格には、精神分析でいう《強迫的性格》(compulsive character) というものを窺うことができ、事實、それと似かよつた部分も大いに含まれている⁽⁶⁾。前節でみたように、ポリシエヴィキの行動の背後には、無意識的衝動がたたえられ、それに對する強迫的な意識の誇張化といつた現象が認められよう。しかし、前述したように、ライツの解釋は、ポリシエヴィキのイデオロギーや社會構造を無視したままのフロイド理論の適應であるというように見受けられる。ポリシエヴィキの《意識》は、無意識のたんなる合理化であるとか、あるいはさらにすすんで、それ自身がいわば虚偽の意識にすぎないというように受けとられないであろうか。ややもすると、ライツの解釋には、そういう誤解を生む原因が内在している。

すでに本稿のはじめの方で、ライツの研究においては、ポリシエヴィズムの構成と精神分析理論とは直接關連を有しないことを述べておいたが、彼にあつては、内容分析そのものが、精神分析と不可分に結びついている。ライツが、ポリシエヴィキの言語的シンボルの裏に廻つて、その深い底流をあかるみにだそうとした努力は、われわれの氣付かない心理的側面を解明した點で、それが成功しているかどうかは別とし、すこぶる重要な意義をもつている。しかしながらまた、「ライツの

いうように、ポリシェヴィキ的性格の源泉は、十九世紀におけるロシア・インテリゲンツィアの極端な氣質に對する反動のうち横たわつていふことは、まだフロイドの助けを借りなくとも、歴史を書けることだ。つまり、レーニンとその協力者は、ロシア的性格の傳統のパターンを逆轉しよう、カスターエフやオブローモフを克服しようとする試みに、まったく意識的であつた、と。ところが、ポリシェヴィキ的性格を無意識的な、壓倒的に強力な願望に對する《反動形成》として、ライツが語るとき、彼は精神分析以前には不可能であつた方法で、政治にアプローチしてゐる」といわれるのもつともである。ライツはわざわざ手のこんだ精神分析理論をもちいてゐる、という印象を與えるところも、決して少なくないからである。

つぎに、内容分析についてみると、先ず、ライツはしばしば、黨のリーダーシップの變化とか世界政治の諸要因に附加的に言及してはいるが、そのような狀況とのコンテクストにおいて、ポリシェヴィキはダイナミックに反應してゐるとはいつても、それにもかかわらず、つねに一定の行動のパターンがある、と考へられてゐるのである。すなわち、一九〇三年から一九五二年までのあいだの彼らの行動の連續性を前提としつつ、その政治的シンボルや言語的記録のユニフォーミティを内容分析してゐるわけである。この場合、ライツの内容分析に關する限りであるが、そういった素材の扱い方が技術的に餘り明確にされていない。ポリシェヴィキの言語的表現、ないし内容のユニフォーミティは、その時に應じて、まつたく多様な含みをもつており、ましてや彼らの事實上の行動のユニフォーミティが、それから期待できるものではない。「……すべての政治的言語表現の分析における基本的問題は、政治家が自己の確信からものをいふことと、たんに効果を狙つていうこととに區別を設けることである。……ソヴェトの sacred texts の分析にも、このような困難な問題、根本的な戰術をあらわしてゐる言明と區別して、戰略的目的や効果のためにいわれたものを決定するという問題が含まれてゐる」。この點は、ポリシェヴィキの言語的記録を内容分析するに當つて、いかに慎重であつてもありすぎることはないであらう。

右と關連したことがあるが、ポリシエヴィキの行動とロシア的人間との關係についてはどうか。ライツはこれを、連続性としてよりもむしろ、非連続性^{フェイスレインライツ}として扱っているが、ポリシエヴィキの行動を理解するのに、ロシア文學との關連づけが必要である——ライツの説明は、あたかもそれがいわば *sine qua non* であると主張しているようであるか——というのはなぜか。彼の内容分析におけるロシア文學の素材の取扱いについて、だれでもが差し挟みたくなる疑問とは、單純なものである。すなわち、「ロシア古典文學の責めさいなまれた、傷ましい人物、レオ・トルストイの「クロイツォル・ソナタ」におけるボズドヌイシエフ、ドストエーフスキイの『罪と罰』におけるラスコルニコフ、あるいは、チェーホフの『櫻の園』の諸人物のごときは、ロシア的な行動や態度に、多くの光を投げかけているのか」ということである。すでにみたように、レーニン、スターリンの言葉のうちにも、ロシア文學上の代表的人物がたびたび引き合いにだされていた。そしてそれらは、もはや文學的な代名詞ではなくて、實質的な意味をもつ政治的比喩である、ということとは想像に難くない。だがそれにして、ロシア・インテリゲンツィアの反動形成（といつても、精神的な意味においてではなく）としてのポリシエヴィキという假説は、ロシア文學という素材と彼らの言葉との *juxtaposition* によつて證據づけられるものではない。さらに、そのことによつて、ソヴェトの現實を指示しているという結論に達するには、より確實^{コンクレート}なデータが得られなければならないことはいうまでもない。

ところが幸いにして、われわれは、E・J・シモンズ等の實證的研究によつて、ライツの假説が、ある程度、確證されることを知らされている。周知のように、現代ソヴェトにおいては、作家には、藝術の自由はまったく拒絶されており、彼の創造的精神というものは、黨によつて命ぜられた思想、信念、忠誠心の一定の型に制約されてしまつてゐる。したがつて、「今日のソヴェト文學は、ただの平均的な男女を描くことを誇りとしてゐるが、それも、理想化された肯定的な主人公や主人公の公式的イメージにあてはめられてゐる」⁽¹¹⁾。黨のコントロールは、あきらかに、文學に反映しており、「ソ同盟におけ

る過去三十五年間の文學に對するコントロールの歴史は、黨の歴史と密接に結びついて⁽¹²⁾いるといえる。にもかかわらず他方で、シモンズによると、「ソヴェト文學のかなり多くの内容に、《ブルジョワ的殘存》のテーマが依然として存在していることは、それらを排除しようとして、黨が向けてきた三十七年間の努力の後にも、それが宣傳的成功ほどにかんばしくない、ということを示唆している。ソヴェトの國外追放者——そのほとんどがもと作家であつた——のかなりのサンプルにおいて、筆者がおこなつた、文學のコントロールに關するインターヴィューと質問法の研究のうちには、小説や演劇に示されたソヴェトの現實に對する忠誠はどうであるか、また、讀者によつてそれがどの程度受けいれられているか、という質問に對する答えが含まれていた。その結果は、すべての點で結論に達したわけではないが、ソヴェトの讀者は、小説や演劇の肯定的な主人公や女主人公を非現實的であるとして拒否し、いわゆる否定的人物、物ごとの公式的スキームに反對するものを、ソヴェトの現實にとつて正しいものであると考へる、というのが普通の答えであつた⁽¹³⁾」と。

さらに、G・デニツクによれば、「なによりも先ず、ロシア古典文學は、ソヴェトのひとびとにとつて、なにか奇異な、理解しがたいものとは思われず、……それは有意味であり、重大な結果をはらんでいるということが、疑いなく證明されている。というのは、それが、革命後に生じた諸變化のゆえに、ア・プリオリには疑わしいものであつた^{コシテイニユイライ}連續性の存在をあまりにきらかにしているからである。……たしかに、多くのひとたちにとつては、革命前の小説を讀んだり、非ソヴェト的演劇を観たりすることはまた、しばしのあいだ、ソヴェトの現實から逃避できるありがたい機會である。しかし、ソヴェト社會にもつとも廣く、かつ一貫した嗜好を明白に満足させている作品の人物というものは、それらの作品の大衆性が、彼らの情緒的訴え、いわゆる彼らの心理的・道德的風土といつたものの魅力に、本源的に基づいているということを、證明している。……その證據は、《ブルジョワ・イデオロギーの殘存》⁽¹⁴⁾は、ソヴェト・プロバガンダの發想ではなくて、プロバガンダが自認しているよりはるかに廣範なものであることをはつきりと確證している」。

そもそも、内容分析はコミュニケーション内容を「丹念に單純化する手續⁽¹⁵⁾」であり、非常に骨の折れるわりに、得るところが少ないといわれる。それは、一般的に、明白なものを確認するだけのことで、不必要にやつかいで犠牲を拂うように思われる。⁽¹⁶⁾そして、方法としては、ベレルソンのいうように、なにも魔術的性質をそなえたものではなく、當然のことではあるが、インプツ以上のもをそこから取り出すことはできないのである。⁽¹⁷⁾この點は、ライツの研究結果についても眞實である。したがつて、「おそらく本書に對する一番公平な判断は、それが廣々とした沙漠を横切つて途を開拓していつたのであるが、向う側に見出したものは、エデンの園に見劣りするものにすぎなかつた⁽¹⁸⁾」というR・H・フィアアの批評は當つてゐる。

もちろん、内容分析によらなくては、ポリシェヴィキの行動の客觀的記述は不可能である、というのは言い過ぎであらう。やはりそれは、ポリシェヴィズムについての説明の特殊な型でしかない。しかしわれわれは、ライツの内容分析によつて、ポリシェヴィキの行動の仕組みを客觀的に把握することができる。彼は、ポリシェヴィズムに一定の構成を與えたわけであるが、この點に彼のすぐれた理解力が示されている、といえよう。なぜなら、内容分析に限らず、理解とは、所與の分析對象に對する構成力のことであらうからである。ポリシェヴィズムの有り餘るコミュニケーション内容をただ漁り廻つたところで——“fishing expedition”——それからなにも捕捉することはできない。ライツの設定したカテゴリーは、現在もこれからも、ポリシェヴィズムのコミュニケーションの流れを、分析し組織化してゆく上に、きわめて有効であると思われる。

しかしながら、すでに述べたように、われわれは、ライツの構成をポリシェヴィキの事實的行動と比較し、その差異をあきらかにしなければならぬ。⁽¹⁹⁾言語的表現のユニフォームイティからして、いつでも彼らの事實的行動もそうである、とするような保證はどこにもない。事實的行動の場合、それはたとえ本質的に同一であつても、現象的に異なつてゐるということ

は、實際には、曖昧にすまされる問題ではないであらう。したがつてまた、ライツの構成自體、ポリシエヴィキの抽象的な言語的記録からの抽出であるということ、その限りそれは、ひとつのモデル構成にすぎないということを、われわれは注意すべきである。それが確證されるためには、先の文學の場合にみたように、ポリシエヴィキの實際の行動の世界から、さまざまのデータを収集してきて——現段階では、そのような試みは、いちじるしく困難であるが——檢證されなければならぬ。ライツ自身も「事實觀察——spectators, participant observers, interviewersによる——の必要性を認めているが、そうした結果から、ライツのモデルの再構成をおこない、それを一層妥當なものとし、かつ實用的なものとしなければならぬ。かくしてはじめて、それはポリシエヴィキの行動に、ある程度の豫測を與えることも可能とならう。⁽²⁰⁾それに反して、このモデルに無暗と行動を押しつけ、各カテゴリーの機械的操作をほどこすようでは、觀察者の明眸は、かえつて歪曲された形姿でしかポリシエヴィキをみぬことになってしまう。

(1) Carl J. Friedrich and Zbigniew K. Brzezinski, *Totalitarian Dictatorship and Autocracy*, Cambridge Mass., Harvard University Press, 1956, p. 76.

(2) Leites, *op. cit.*, pp. 15-16.

(3) ライツは、本書において、レーニンのパソナリティを究明しているわけではない。しかしながら、彼は多くの箇處において、レーニンのパソナリティ特性の例を参照し、ポリシエヴィキの性格と関連づけている。たとえば、ポリシエヴィキが感じとつている不安なり危険なりを、レーニン個人の、いささか神經症的な不安感をほのめかす生活體驗によるものとしている。ゴゴリのロンドンにおけるレーニンの思い出を記し(『追憶』下巻二一—二二頁)。

私が泊つているホテルにやつて來たが、見ると心配そうに寢床にさわつてみている。

「そりやなにをしておいです?」

「見てるんです——シーツが濕つてくはないか」

私はすぐ解せなかつた。……すると、私の不審に氣づいて、説明した

「あなたは自分の健康に氣をつけないけません」

このように、ホリシエウスキの政治的生存の危機感を、レーニン自身の「あるは、インテリゲンツィアの性格に還元する解釋は、決して極端な結果を招く恐れなし」としないが、重要な示唆に響かしているものと思われる。筆者は、レーニンのパーソナリティ形成、あるいはまた、ロシア人の《國民性》などについては、psycho-cultural approach として、後の機会にまともな發表する豫定である。

- (4) Alfred Meyer, *Leninism*, Cambridge Mass., Harvard University Press, 1957, pp. 80-81.
- (5) Daniel Bell, "Ten Theories in Search for Reality: the Prediction of Soviet Behavior in the Social Sciences" in *World Politics* Vol. X, No. 3, April 1958, pp. 343-344.
- (6) 《強迫的性慾》を關しては、ケスネメチとナザン・レイテスが「ナチズムの精神分析的研究において、つくられた論文を發表している。Paul Keskeneti and Nathan Leites, "Some Psychological Hypotheses on Nazi Germany," *The Journal of Social Psychology*, Vol. XXVI (1947), pp. 141-183, Vol. XXVII (1948), pp. 31-117, pp. 241-270. Vol. XXVIII (1948), pp. 141-164.
- (7) この點をめぐり、ローエンター・ルグターマンが同じような方法をもつて、煽動者の研究をしてゐるが、その精神分析的解釋はきわめて成功した成果を収めてゐる。煽動のテーマは、その表面にあらわれた内容によつては理解できず、それらは一種の心理的言語を構成してゐる。したがつてそれらは、心理的意味に移し變えることによつて、首尾一貫した、社會的に重要な意味をもつものとされる。「煽動者とは何者であるか、彼のこととは何であるかを知るためには、われわれは彼について、意味の裏にまで廻つてみなければならぬ。……心理的な内容に翻譯することなしに、煽動のテーマを理解することは不可能である」。ローエンター・ルグターマン、辻村明譯『煽動の技術——欺瞞の豫言者』(二二八頁)からである。
- (8) Bell, loc. cit., p. 341.
- (9) John S. Reshefer Jr., *Problems of Analysing and Predicting Soviet Behavior*, p. 9.
- (10) *Ibid.*, p. 52.
- (11) Ernest Simmons, (ed.) *Through the Glass of Soviet Literature: Views of Russian Society*, New York, Columbia University Press, 1953, Introduction, p. 23.
- (12) *Ibid.*, p. 10.
- (13) Ernest Simmons, (ed.) *Continuity and Change in Russian and Soviet Thought*, Cambridge Mass., Harvard University Press, 1955, Part V, Review, pp. 463-464.
- (14) Quoted by Simmons, *Ibid.*, pp. 467-468.

- (15) Harold Lasswell, Daniel Lerner and Ithiel de Sola Pool, *The Comparative Study of Symbols: An Introduction*, Stanford, Stanford University Press, 1952, p. 52.
- (16) Arnold Brecht, *Political Theory: The Foundations of Twentieth-Century Political Thought*, Princeton, Princeton University Press, 1959, p. 45.
- (17) Bernard Berelson, *Content Analysis in Communication Research*, p. 198.
- (18) Book Review by Raymond H. Fischer, *American Historical Review*, Vol. LX, No. 1, October 1954, p. 109.
- (19) この語は、ライソンのモデル構成で多くの示唆を齎らうて、共産主義者のオズバーン、モナル・モデルを構成しているD・マードック等の研究 (Gabriel Almond, *The Appeals of Communism*, Princeton, Princeton University Press, 1954, p. 8, note 1.) は、おもわめてすぐれた成果をもたらしている。本書の内容については、筆者は『法學研究』第三十二卷第二・三合併號(一九五九年二月)の資料欄に紹介しておいたので、詳しくはそれを参照されたいが、簡単に記しておく。著者は、先ず共産主義の古典文獻を内容分析して、共産黨および黨員に關するテーマの量的頻度をかぞえ、共産主義者のモデルを設定する。そしてさらに、前黨員のインタerviewerによつてえた資料をもととし、モデルと現實との差異をあきらかにしている。かくてわれわれは、そのモデルの有効性と作用している現實とが、經驗的研究によつて確認されているのを見ることが出来る。
- (20) その成果のほどは分らないが、ネルによれば、ライソンの *The Operational Code of Politburo* ——これは、『ホリシエウイズムの研究』のカテゴリーの部分の要約的にあらわしたものである——は、朝鮮動亂の休戰協定に際して、アメリカ側の交渉者によつて、實際で *tactical manual* として使用されたといわれる (Bell, loc. cit., p. 389.)。